

# 成人看護学領域における移植医療教育に関する文献検討

川久保 和子    宮武 陽子    中村 史江    佐藤 栄子    青山 みどり

足利工業大学看護学部成人看護学

## 要旨

【目的】成人看護学領域において、学生を対象とした移植医療に関する教育内容の現状を整理し、今後の課題を明らかにする。

【方法】成人看護学領域における移植医療に関する授業の実践状況と教育効果を明らかにするため、先行文献を検討し「対象者」、「科目」、「授業テーマ」、「授業時間」、「授業担当者」、「教育内容・方法」、「評価指標」および「結果（教育効果）」に着目し分析を行った。

【結果・結論】教育の実践状況は、講義によるものとディベート演習があり、授業時間にはばらつきがあった。教育効果は、授業時間に関わらず授業の内容そのものが学生の学びに大きく影響するということがわかった。また、授業のなかで学生は、移植医療について肯定的な部分と移植医療の現状やその問題点などについて一部分ではあるが捉えることができた。しかしながら、倫理的側面における判断能力を身につけるには、さらに移植医療の実際について学べるよう教授方法や内容について十分検討して行く必要がある。

キーワード：臓器移植，移植，脳死，看護，学生，教育

## I . はじめに

日本移植学会によると、臓器移植とは、臓器が障害され生命が危ぶまれたり、生活が非常に障害されたりするようなときに、他の人から臓器をもらって快復を図るものである。臓器移植の種類には、生体臓器移植と死体臓器移植があり、死体臓器移植の中でも、脳死になった方からいただいた臓器を移植することを脳死臓器移植という<sup>1)</sup>と述べている。

脳死臓器移植においては、2010年7月に改正臓器移植法が全面的に施行され、脳死下での臓器提供条件が大幅に緩和されたことにより、本人の臓器提供意思が不明な場合であっても家

族の承諾により脳死状態での臓器提供が可能となった。年間の脳死下臓器提供者件数を見てみると、現行法が施行された2010年では32件であったのに対し、2013年では47件<sup>2)</sup>と徐々に増えてきており、これまで移植でしか助からないといわれていた命を繋ぎとめることができるようになってきた。しかし、2014年11月の臓器別移植希望登録者数を見てみると、心臓347名・肺236名・肝臓406名・腎臓12,612名・膵臓200名・小腸5名<sup>2)</sup>であり、移植を待たなければならない現状にある。また、小腸移植希望登録者の年齢は記載されていなかったものの、その他の各臓器においては、30歳代から

50 歳代といった成人期での登録者がとくに多い<sup>2)</sup>。

日本の移植医療は、海外に比べてまだまだ遅れをとっていることもあり、移植希望登録者数に比べて臓器提供者が少ないということは否めない。そして、移植待機患者が海外での移植を決断しなければならないという状況もある。このため、国や日本臓器移植ネットワーク（Japan Organ Transplant Network; 以降、JOT と略す）は、メディアなどのさまざまな媒体を通して「命のリレー」、「善意の心を継ぐ医療」というようなキャッチフレーズを用いて啓蒙活動を行っている。

「脳死」という新しい「死の概念」が生まれるまでは、三徴候（心拍停止・呼吸停止・瞳孔散大）に基づいて人間の死が確認されていたため、看護師は亡くなった患者の家族に対する心の支援が主であった。しかし、人工呼吸器の登場および移植医療拡大のため脳死＝死とする風潮が広がり、今日の医療においては、その飛躍的な進歩により生命を操作できる段階にまできている。

これにより、看護師は対象となる患者やその家族を支援していくなかで、多様な意思決定の場面に遭遇する機会が多くなり、こうした状況にある現代の医療現場で働くであろう看護学生は、今後も増え続けていくと予想される移植医療について、その現状や問題点を正しく理解し学ぶことが重要になってくる。また、対象となる患者やその家族に対して適切に対応していく能力も養わなければならない。

月田ら<sup>3)</sup>は、「移植医療において看護師は、ドナーとその家族、レシピエントというように様々な立場から患者やその家族に関わる可能性がある。そのため学生時代から人の死や脳死について考える機会をもち、死を取り巻く経験を重ねる中で死生観を育てる必要がある」と述べている。

しかしながら、看護基礎教育の限られた授業時間の中で、このような能力を育成することは、容易いことではないということ、および移植希望登録者の多くが成人期にあたるということよ

り、本研究では成人看護領域において移植医療に関する教育がどのように実践されているのかを先行文献から検討する。さらに、教育の現状と教育効果について把握するとともに、それを整理することで今後の課題を明らかにする。

## Ⅱ．研究目的

成人看護学領域において、学生を対象とした移植医療に関する教育の現状を整理し、今後、授業設計していくうえでの課題を明らかにする。

## Ⅲ．研究方法

### 1. 研究期間

平成 26 年 8 月～平成 26 年 11 月

### 2. 対象文献

対象とした研究論文の抽出方法は、医学中央雑誌 Web 版を使用して平成 26 年 8 月末に行った。「臓器移植」「移植」「脳死」「看護」「学生」「教育」のキーワードを組み合わせ、会議録を除外し検索を行ったが抽出された文献数が少なかったため、論文の掲載された年を限定せずに検索を行った。その結果、医学中央雑誌 Web 版で 58 文献が抽出された。

今回の研究では、成人看護学領域における授業の現状を把握することが目的であるため、文献の抄録を精読し、さらに臨地実習や他の科目に関する論文を除外し、最終的には 4 文献を研究対象とした。

### 3. 分析方法

研究対象とした 4 文献で、移植医療に対する授業の実践状況と教育効果を明らかにするため、対象者、科目、授業テーマ、授業時間、授業担当者、教育内容・方法、評価指標および結果に着目し分析した。

なお、4 文献中 1 文献で看護系以外の専攻科学生および大学院生が研究対象に含まれており、授業科目も看護領域ではない科目が含まれていたが、本研究では看護系の学生のみデータを収集し、他学生のデータは除外した。

また、授業を受けることによって学生の移植医療に対する捉え方や意識の変化、そして学び

の内容から教育効果を明らかにすることが本研究の目的であるため、授業前の学生の移植医療に対する捉え方や意識についてのデータも分析から除外した。

## IV. 結果

### 1. 対象文献の概要

今回の研究対象となった文献を表1に示す。

研究目的について高橋ら<sup>4)</sup>は、「生体腎移植を受ける患者の看護についての講義における学生の学びを明らかにする」であった。荒木<sup>5)</sup>は、「脳死による臓器移植に関して、報道されなかった情報および脳死による臓器移植に関するビデオの視聴を通して、脳死による臓器移植の問題を知るとともに自らの考えを深める」であった。舟根ら<sup>6)</sup>は、「成人看護学で行っているディベート演習が、学生のどのような学びにつながっているかを明らかにする」であった。渡邊ら<sup>7)</sup>は、「臓器・組織提供に関する賛否および臓器・組織移植の認識についての経時変化と講義によるそれらの意識の変化、教育効果の検討をする」であった。調査方法は、全ての文献で「アンケート調査」であった。

### 2. 授業の実践状況と教育効果

移植医療における授業の実践状況と教育効果を表2に示す。

#### 1) 授業の実践状況

対象は、「1年次生」、「2年次生」、「4年次生」

であり、3年次生では行われていなかった。

授業科目は、「急性期看護方法Ⅱ」、「成人看護学概論」、「成人看護学Ⅳ」、「クリティカルケア看護論」であった。

授業（演習）のテーマは、「生体腎移植を受ける患者の看護」や「脳死による臓器移植」、「臓器移植について」であり、また、「病気の活動期や手術後など、急性期にある患者やその家族への医療と看護について、専門的な知識と技術を学ぶ」というテーマが挙げられていた。

授業時間は、「90分」や「1コマ」という授業時間から、「授業の準備学習として2か月間および演習のオリエンテーション2時間さらに演習4時間」という授業時間であった。また、高橋ら<sup>4)</sup>の研究では「記載なし」であった。

授業担当者は、「成人看護学教員」が3文献であり、その他1文献では「移植コーディネーター」であった。

教育方法は、「講義」によるものが3文献であり、1文献は「ディベート演習」であった。

教育内容として高橋ら<sup>4)</sup>は、「腎移植の概要・生体腎移植決定までの心理・拒絶反応を予防するための看護」であった。荒木<sup>5)</sup>は「ビデオ視聴（臓器移植後、人生を得られた人々の実際とドナーになった息子の死に苦悩する母親の受容過程、移植を受けた人の喜びと苦悩）。脳死臓器移植の実態を説明（和田移植について・1992年法律制定後初の移植現場レポート・海外移植

表1 対象文献と研究概要

研究者	タイトル	研究目的	調査方法	研究対象者
高橋 由起子ら <sup>4)</sup>	生体腎移植を受ける看護についての学び—講義終了後の質問紙からの分析—	「生体腎移植を受ける患者の看護」についての講義における学生の学びを明らかにする	アンケート調査	看護大学2年生80名
荒木玲子 <sup>5)</sup>	「脳死による臓器移植」に関する意識調査—メディア・リテラシーの視点による考察—	「脳死による臓器移植」に関して、報道されなかった情報および「脳死による臓器移植」に関するビデオの視聴を通して、「脳死による臓器移植」の問題を知るとともに自らの考えを深める	アンケート調査	看護科1年次58人
舟根妃都美ら <sup>6)</sup>	成人看護学におけるディベート演習についての検討	成人看護学で行っているディベート演習が、学生のどのような学びにつながっているか明らかにする	アンケート調査	短期大学看護学科2年生48名
渡邊和誉ら <sup>7)</sup>	神戸大学医学部保健学科生の移植医療に関する意識の変遷	臓器・組織提供に関する賛否および臓器・組織移植の認識についての経時変化と講義によるそれらの意識の変化、教育効果の検討をする	アンケート調査	2001年度から2007年度生、大学医学部保健学科看護学専攻4回生192名、その他、理学療法専攻3回生145名と検査技術科学専攻4回生158名および大学院生139名。

表 2 授業の実践状況と結果（教育効果）

研究者	授業の実践状況					結果（教育効果）	
	対象・学年・人数	授業科目	授業テーマ	授業時間	授業担当者		
高橋由起子 <sup>4)</sup>	看護大学2年生 80名	急性期看護方法Ⅱ	生体腎移植を受ける患者の看護	90分	成人看護学教員	講義 「腎移植の概要」、「生体腎移植決定までの心理」、「生体反応を予防するための看護」の3点	講義後版白紙を配布し、自由記載による講義についての学びの内容（記入時間は5分）
							学びのカテゴリー化により7つのカテゴリーを抽出、「メンタルサポートの必要性」28.9%では、「ドナーは移植が終わりだと思っていたが、ドナーにも視線を向ける必要がある」、「移植後のケアと自己管理」23.9%では、「移植後免疫抑制剤を飲み続けなければならないこと」がかった。「移植に関する知識」24.8%では、「血液が通っていても、腎移植の場合は移植ができることに驚いた」、「移植に対するポジティブなイメージ」8.1%では、「移植がこんなに身近に行われていた」、「移植に対する倫理・社会的課題」7.6%では、「日本はドナーの数が少ない」、「ドナーの自責の念と負担感」5.1%では、「母親の子に対する愛情と周囲の期待があることがある」、「ネガティブな感情」4.6%では、「自分がドナーになるのはいやだ」などであった。
荒木玲子 <sup>5)</sup>	看護科1年次 88名	成人看護学概論	脳死による臓器移植	記載なし	成人看護学教員	脳死臓器移植の理解度調査 ビデオ視聴—臓器移植後、人生を得られた人々の実際、息子（ドナー）の死に苦悩する母親の受容過程、移植を受けた人の喜びと苦悩について。 脳死臓器移植実施説明—和田移植、1992年法律制定後初の移植現場レポート、海外移植で一命を取りとめた人の事実について。授業担当者の考えは一切加えずに事実のみ伝える。	授業後の「脳死による臓器移植」に関する学生の考えでは、「移植するための手術シーンを見たとき、力強く動いている心臓を見ると、脳死する人の死としたいという気持ちになった」、「移植を受ける側も提供する側も苦しみや苦悶があることが分かり、難しい問題だと思った」、「臓器の提供は自分ひとりの問題ではないと思った」、「授業でビデオを見て、臓器移植を受け、元気になった人達の通函する姿、全力で走ることができたり、笑ったりしている姿をみてうれしかった」、「臓器移植について良いのが悪いのが答えはわからないものだと思う」などであった。
舟橋紀都美ら <sup>6)</sup>	短期大学看護学科 2年生 48名	成人看護学Ⅳ	臓器移植について	ディベートと準備学習のオンラインセッション2時間および4時間のディベート演習	成人看護学教員 2名	ディベートの定義・技術や能力について講義 演習テーマの臓器移植と臓器提供に関して、準備学習（約2か月間）の臓器移植希望の有無、臓器提供意思の有無で4つの考え方を提示し、これらに対する自分の考え方をまとめ、その後演習を行った。 ディベート演習では、教員は途中で一切発言をしないことを学生に告知。	学生がディベート演習終了後に提出した、「ディベート演習についての意見・感想」というテーマのレポート内容 レポート内容は11カテゴリーに分類でき、カテゴリー「臓器移植について」は6番目に記載が多かった。具体的内容は、「臓器提供をするしなないに聞かしてはドナーの意思が大きく反映される」、「現在の臓器移植にあるいくつかの問題のうち、脳死についての考え方と、ドナーの家族が抱える精神的負担についてさまざまな意見がある」などであった。
渡邊千恵ら <sup>7)</sup>	大学医学部保健学科 看護学専攻4回生 126名	クリティカルケア看護論	病気の活動期や手術後など、急性期にある患者やその家族への医療と看護について、専門的な知識と技術を学ぶこと	1コマ	移植コーディネーター	移植コーディネーターの立場でしか知りうることでない経験などについて講義	2015～2017年度の講義前後のカード所持の有無及び講義後署名の有無 2015～2017年度の講義前後のカード所持の有無及び講義後署名の有無

で一命を取りとめた人の事実)。また、授業担当者の考えは一切加えずに事実のみ伝える」であった。

舟根ら<sup>6)</sup>は、「ディベートの定義・技術や能力について講義・演習テーマの臓器移植に関して準備学習(約2か月間)・ディベート演習では、教員は途中で一切発言をしないことを学生に告知」であった。また、渡邊ら<sup>7)</sup>は移植コーディネーターによる「その実務と現況(現場でしか知りうることでない経験などについて)の講義」であった。

学生の学びや教育効果の評価指標は、高橋ら<sup>4)</sup>では授業後、自由記載による学びの内容から評価しており、荒木<sup>5)</sup>は授業後の「脳死による臓器移植」に関する考えの内容から評価していた。舟根ら<sup>6)</sup>のディベート演習では、学生が演習終了後に提出した「ディベート演習についての意見・感想」というテーマのレポートから内容を分析しており、渡邊ら<sup>7)</sup>は授業前後のカード所持率の変化やカードへの署名率の変化などで評価していた。

## 2) 対象文献の研究結果(教育効果)

高橋ら<sup>4)</sup>の研究結果からは、学びの Kategorization により7つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーの1つである「メンタルサポートの必要性」28.9%では、具体的な内容として“ドナーは移植が終わればそれで終わりだと思っていたが、ドナーにも視線を向ける必要がある”といった記述があり、「移植後のケアと自己管理」23.9%では、“移植後免疫抑制剤を飲み続けなければならないことがわかった”、「移植に関する知識」21.8%では、“血液型が違っていても、腎移植の場合は移植ができることに驚いた”などの記述があった。また、「移植に対するポジティブなイメージ」8.1%では、“移植がこんなに身近に行われていた”や「移植に対する倫理的・社会的諸問題」7.6%では、“日本はドナーの数が少ない”、「ドナーの自責の念と負担感」5.1%では、“母親の子に対する愛情と周囲の期待があることがある”、「ネガティブな感情」4.6%では、“自分がドナーになるのはいやだ”などであった。

荒木<sup>5)</sup>の研究結果は、授業後の「脳死による臓器移植」に関する学生の考えの内容から、“移植するための手術シーンを見たとき、力強く動いている心臓を見ると、脳死を人の死としたりしないという気持ちになった”。“移植を受ける側も提供する側も苦しみや苦悶があることがわかり、難しい問題だと思った”。“臓器の提供は自分ひとりの問題ではないと思った”。“授業でビデオを見て、臓器移植を受け、元気になった人達の運動する姿、全力で走ることができたり、笑ったりしている姿をみてうれしかった”。この他“臓器移植について良いのか悪いのか答えはわからないものだと思う”などが記述された。

舟根ら<sup>6)</sup>の研究結果では、レポート内容から11のカテゴリーが抽出され、カテゴリーのなかの1つである“臓器移植について”は6番目に記述が多かった。具体的内容は、“臓器提供をするしないに関してはドナーの意思が大きく反映される”、“現在の臓器移植にあるいくつかの問題のうち、脳死についての考え方と、ドナーの家族が抱える精神的負担についてさまざまな意見がある”などであった。

渡邊ら<sup>7)</sup>の研究結果では、2005～2007年度の授業前のカード所持率は55.6%であったが、授業後のカード所持率およびカード署名率は81%と増加していた。

## V. 考察

### 1. 授業の実践状況

今回、成人看護学領域での移植医療に関する授業の実践状況を文献より分析した。

授業テーマは、4文献中2文献で脳死や臓器移植についてが挙げられており、他の2文献では移植医療を受ける患者の看護やその家族への看護が挙げられていた。

脳死・臓器移植に関しては、医療技術の進歩、新たな治療法の開発や先端医療にみる医療の変化により、生や死への価値が多様化し変容してきているため、その問題は山積している。現代の医療現場で働くであろう看護学生に、脳死・臓器移植に対する医療について学ばせることは極めて重要であり、また、こうした医療の対象

となる患者や家族について、その看護援助を学生に考えてもらう授業は必要不可欠であるともいえる。

授業時間を見てみると、90分であったり、準備学習に約2か月間および演習オリエンテーション2時間さらに演習4時間というように、かなり時間をかけての授業もあった。移植医療が抱える問題の大きさを考えると、90分という授業時間は短いようにも思われたが、教育効果を見てみると移植医療に対する肯定的な部分と、移植医療の現状やその問題点などについて一部分ではあるが学生は捉えることができていた。

## 2. 教育効果

一般的に「脳死」や「臓器移植」に関する情報を知るためには、テレビや新聞などのメディアによる報道やインターネットなどが主な情報源となる<sup>5)</sup>。マスコミでもあまり報道されることのないドナーの立場<sup>8)</sup>について、高橋ら<sup>4)</sup>の生体腎移植の授業後では、“ドナーは移植が終わればそれで終わりだと思っていたが、ドナーにも視線を向ける必要がある”と学生の記述があった。この記述は、回答率が一番高率であった「メンタルサポートの必要性」というカテゴリに含まれた内容であった。学びの記述が一番多いということは、逆に言えば学生にとって全く知らない情報を学ぶことで、最も印象に残ったものだったとも考えられる。そして、それに対する援助の必要性についても学習するきっかけになるのではないかと考えられる。

荒木<sup>5)</sup>の脳死・臓器移植においては、授業時間の記載がなかったものの、“移植するための手術シーンを見たとき、力強く動いている心臓を見ると、脳死を人の死としたりたくないという気持ちになった”という学生の記述があった。脳死患者の状態をビデオにより視覚的に捉えることで、その事実を知ることができたと言えよう。

また、レシピエントの立場においては、高橋ら<sup>4)</sup>の研究で回答率が2番目に高かったカテゴリ「移植後のケアと自己管理」のなかで“移植後免疫抑制剤を飲み続けなければならないことがわかった”という記述があった。荒木<sup>5)</sup>の

研究では“移植を受ける側も提供する側も苦しみや苦悶があることがわかり、難しい問題だと思った”という学生の記述もあった。レシピエントの立場において、一般的に移植術を受けることさえできれば延命できると信じている者は少なくなく、また、レシピエントのその後の生活にまで眼を向ける者も多いとは言えない。これらを考えると、学生の学びからは、移植医療の現状についての一部分を知ることができ、ドナーやレシピエント双方の問題点について学べたと思われる。

舟根ら<sup>6)</sup>は、準備学習2か月間およびオリエンテーション2時間、さらに演習4時間とかなり授業時間数をかけていた。しかしながら、「臓器移植について」は11のカテゴリのなかで6番目に多い記述であり、「臓器移植について」という内容の演習であったことを考えると、テーマに関連した学びの記述が少ないようにも思われた。学びの具体的内容は、“現在の臓器移植にあるいくつかの問題のうち、脳死についての考え方と、ドナーの家族が抱える精神的負担についてさまざまな意見がある”などであった。

そもそもディベートは、学習結果よりも学習のプロセスを重要視し、論理的思考を養う教育の一環として用いられる<sup>9)</sup>。このため、学生の学びの具体的内容からも“臓器移植にあるいくつかの問題”や“精神的負担についてさまざまな意見”といったように物事を全体的に捉えた表現となったと思われる。また、演習後に学生が書いたレポートテーマも「ディベート演習についての意見・感想」であったことから、ディベート演習全体に対してのレポート内容と考えられる。そのため、どちらかという「臓器移植について」というよりは、学生の学びの結果としては、ディベート演習の学びや気づきについてより多く記述されたのだと思われる。

渡邊ら<sup>7)</sup>の研究では、移植コーディネーターによる1コマの授業時間であり、授業前後のカード所持の有無や授業後のカード署名の有無により授業の評価をしていた。このため、前述の3つの文献のように学生が移植医療について学ん



だ内容の詳細は不明だが、移植コーディネーターによる授業は、現場でしか知りうることで、できない経験<sup>7)</sup>などを学生は聴くことで、その後のカード所持や署名にも影響を与えたと考えられる。それは、2005～2007年度の授業前のカード所持率が55.6%であったのに対し、授業後のカード所持率およびカード署名率は81%と増加したことからも言えるであろう。

JOTは、2014年3月3日～10日において10代～60代の男女1,000人を対象に「臓器提供の意思表示に関する意識調査」<sup>10)</sup>を実施している。その結果、臓器提供意思表示カードの所持率は23.1%（前年度18%）、記入率は11.1%（前年度11.1%）であった。この結果と渡邊ら<sup>7)</sup>の教育効果を照らし合わせてみると、渡邊ら<sup>7)</sup>の研究で学生のカード所持・署名率がかなり高率であることがわかる。さらに、講義前においてもJOTが行った意識調査よりカード所持・署名率ともに高率であり、論文中に「将来医療従事者として移植医療に従事する可能性のある学部生に対し」といった記述があることから、移植医療向上に向けた教育が以前より行われていたことが推測できる。

本来、移植コーディネーターは中立的な立場で移植医療に携わる。しかしながら、日本の移植医療は海外に比べてまだまだ遅れをとっていること、および移植希望登録者数に比べて臓器提供者が少ないということもあり、移植コーディネーターによる移植医療の普及啓発活動が行われているのも事実である。これらを加味すると、授業後のカード所持率およびカード署名率が高率となった誘因に、移植コーディネーターによる授業の内容が学生のカード所持および署名に大きく影響したのではないかと考えられる。

これに対し高橋ら<sup>4)</sup>の研究結果からは、授業後の学生の反応として、移植に関してポジティブな面とネガティブな面の両側面から学生は考えることができた。また、授業内容が、ドナーやレシピエントの双方を取り扱い、かつ、授業担当者の考えは一切加えずに事実のみ伝える方法の授業であった荒木<sup>5)</sup>の研究では、脳死・臓

器移植の複雑な問題に気づけた。それは、ただ良いものというイメージから具体的な問題を考えなければならないものであると変化し、さらに、それまでの情報の偏りを自覚した学生もいた。

この他、ディベート演習を行い、かつ、演習に立ち会う教員は、途中で一切発言をしないことを学生に告知した舟根ら<sup>6)</sup>の授業では、臓器移植についての学生の学びからは、肯定や否定といった内容が出てこなかった。これは、ディベートが肯定的立場と否定的立場に分かれて論理合戦することで、自分の考えや意見を述べ、反対者の意見に対し討議できる能力を養う<sup>9)</sup>ことをねらいとしているからであろう。

以上のことより、授業担当者が移植医療についてどのような内容で授業を進めるかにより学生の学びは大きく影響される。

志自岐<sup>11)</sup>は、「看護専門職として、看護の質の保証を行い、社会の人々のニーズに応えていくには、看護職者が倫理的側面における判断や意思決定能力を身につけ、それを実践に反映させていくことが不可欠となる。限りある資源、さまざまな人々（対象者とその家族、医師や看護職などの医療専門職、など）の価値が錯綜する、複雑な医療現場において、看護倫理についてどのように教員が学生に関わるかは、看護基礎教育における今後の課題であろう」と述べている。

今回研究対象となった文献に共通して言えることは、移植医療の現状やその問題点について、一部分ではあるが学生は捉えることができた。しかしながら、学生が看護師となり、倫理的側面における判断能力を身につけるには、もう少し踏み込んだ内容、つまり情報開示の問題やマスコミの報道のあり方、脳死判定基準や判定方法の問題、ドナーやその家族・レシピエントの移植後の心理的变化なども学習する必要があると考える。今後、さらに移植医療について学べるよう、授業時間の確保も考える必要がある。また、高度な医療は倫理的問題を有し複雑である。今後、看護師としてこのような複雑な現場に立つであろう学生に対し、患者やその家

族へ適切に対応していく能力が身につくよう、教授方法や内容についても十分検討する必要がある。

## VI. 結論

本研究では、成人看護学領域において、移植医療に関する教育実践状況および教育効果を先行文献より分析し検討した。

移植医療に関する教育の実践状況は、講義によるものとディベート演習があり、授業時間は90分から準備学習を含めて2か月あまりといった授業もあり、ばらつきがあった。授業時間に関わらず、授業内容が学生の学びに大きく影響するということがわかった。

教育効果は、授業内容がドナーやレシピエントの双方を取り扱い、また、授業担当者の考えを一切加えずに行われた授業では、学生の授業後の反応としては、移植医療に対し肯定や否定というよりも、難しい問題として捉えられていた。これに対し、移植コーディネーターによる授業では、授業後の学生のカード所持率およびカード署名率が高率となるような意識の変化がみられた。

このように、移植医療についての授業で学生は、肯定的な部分と移植医療の現状やその問題点などについて一部分ではあるが捉えることができた。しかしながら、複雑な意思決定の場面に遭遇したときのための判断能力を身につけるためには、移植医療についてさらに学習する必要がある。今後も移植医療の実際やその問題点について学べるよう、授業時間の確保や教授方法などについても検討することが必要だと考える。

## 文献

- 1) 日本移植学会、臓器移植全般の Q&A、  
<http://www.asas.or.jp/jst/general/introduction/qa2.html>  
(参照日 2015 年 2 月 6 日)。
- 2) 日本臓器移植ネットワーク、移植に関するデータ、移植希望登録者数、<http://www.jotnw.or.jp/datafile/index.html>  
(参照日 2014 年 11 月 13 日)
- 3) 月田佳寿美、池田歩未、藤井和代 (2006) : 看護学生の死生観に影響する要因と脳死の捉え方、福井大学医学部研究雑誌、7(1/2)、7-13.
- 4) 高橋由起子、松田好美、梅村俊彰 (2010) : 生体腎移植を受ける看護についての学びー講義終了後の質問紙からの分析ー、日本看護学会論文集 看護総合、(40)、362-364.
- 5) 荒木玲子 (2004) : 「脳死による臓器移植」に関する意識調査ーメディア・リテラシーの視点による考察ー、足利短期大学研究紀要、24(1)、45-49.
- 6) 舟根妃都美、成田円 (2007) : 成人看護学におけるディベート演習についての検討、名寄市立大学紀要、1、15-21.
- 7) 渡邊和誉、宇佐美眞 (2009) : 神戸大学医学部保健学科生の移植医療に関する意識の変遷、移植、44 (5)、446-454.
- 8) 山口研一郎監修 (2011) : 脳死・臓器移植 Q & A50 ドナーの立場で “いのち” を考える、7、海鳴社、東京.
- 9) 佐藤みつ子、宇佐美千恵子、青木康子 (2009) : 看護教育における授業設計、163-177、医学書院、東京.
- 10) 日本臓器移植ネットワーク、臓器提供の意思表示に関する意識調査、[http://www.jotnw.or.jp/file\\_lib/pc/press\\_pdf/20140711.pdf](http://www.jotnw.or.jp/file_lib/pc/press_pdf/20140711.pdf)  
(参照日 2014 年 11 月 24 日)
- 11) 志自岐康子 (2000) : 看護基礎教育における看護倫理の教育ー基礎看護学の立場から、看護教育、41(4)、267-271.



## Review of literature concerning transplantation therapy education in the field of adult nursing

---

Kazuko Kawakubo, Yoko Miyatake, Fumie Nakamura,  
Eiko Sato, Midori Aoyama

Division of adult nursing, Department of Nursing, Ashikaga Institute of Technology

### *Abstract*

**【Purpose】** The principal aim of the present study was to clarify the state of educational content for students regarding transplantation therapy in the field of adult nursing and to clarify future issues.

**【Methods】** To clarify the state of implementation of lessons regarding transplantation therapy in the field of adult nursing and to clarify learning effects, we examined past studies and focused on analyzing subjects, course subjects, lesson themes, lesson length, lesson instructors, educational content and methods, and results (learning effects).

**【Results and Conclusions】** With regards to the status of implementation of education, both lectures and debate-style seminars were in use, with variation noted in lesson length. Results for learning effects indicated that student learning was greatly affected by lesson content regardless of lesson length. Furthermore, students were able to partially grasp the positive aspects current status and problems related to transplantation therapy throughout lessons. However, future investigation of instruction methods and educational content is needed to help students to learn about the reality of transplantation therapy and allow them to learn how to make ethical judgments.

**Key Words:** organ transplantation, transplantation, brain death, nursing, students, education